

## ◇ピアノソナタ第18番 ト長調 D.894 「幻想」

シューベルトが最後の弦楽四重奏曲ト長調を作曲した1826年10月に書き上げられた。シューマンはこの曲を「形式と精神において最も完成したもの」と評し、「ここでは全てが有機的で同じ生命を呼吸している」と称賛している。

第1楽章：ソナタの開始としてそれまでになかった新天地を開いている。この柔らかく豊かな和音の揺れは、後に変容を遂げ、揺れ動く主題の不思議な共振が抒情詩的に鳴り響く。素晴らしい夢を見たような不思議な筋運びで、結局その筋は説明できない。

第2楽章：第1楽章の筋の中に憧れの歌（デュエット）を浮かばせる。この中間部にほとぼる激情と深い悲しみは「水車小屋の娘」の主人公の心情と重なって聞こえないか？

第3楽章：同音反復（4楽章にも引き継がれる）のたたみかけるリズムはスケルツォ風だが、優雅な弾みは舞曲（メヌエット）風。トリオのやさしい転調が夢を誘う。

第4楽章：「楽しきさすらい」のロマン的終楽章。幸せなさすらいの若者が体験するいくつかの音楽的エピソードは、「水車小屋の娘」より軽快で「冬の旅」の影など全く予感させない。シューマンはこの楽章について一言だけ言っている。「ファンタジーを持たぬ者は、この楽章に近づくな。」

## ◇ヴァイオリンとピアノのための幻想曲 ハ長調 D.934

シューベルトの最晩年、歌曲「冬の旅」と同時期に、ヨーゼフ・スラヴィークというボヘミア出身の大ヴァイオリニストのために作曲されたもので、ロマンティックな旋律美と共に、ボヘミア的色彩やスラヴ的色彩が豊かに息づき、当時としてはかなり大胆といえるヴィルトゥオーソ的な書法もこの作品の魅力となっている。

また、「さすらい人幻想曲」が歌曲「さすらい人」の音形に基づいて書かれたように、この幻想曲には歌曲「挨拶をおくります」の気品あふれる旋律が3楽章で姿を現す。「さすらい人幻想曲」同様切れ目なく演奏されるが、全体は以下のような6つの部分から構成されている。

第1部：序奏のトレモロは民族楽器ツィンバロンの模倣。このトレモロの揺れはピアノソナタ「幻想」の冒頭とはまた違ったパルスだが、これこそシューベルトの幻想の森の入り口なのだろう。ゆったりしたヴァイオリンの抒情的な歌で始まる。

第2部：ソナタの1楽章に相当する部分で、自由なソナタ形式で書かれ、ヴァイオリンとピアノの技巧的な対話が面白い。

第3部：2楽章に当たる部分。変奏曲形式でリュッケルトの詩による歌曲「挨拶をおくります」D.741 が朗々と歌い出され4つの変奏が続く。

第4部：第3楽章の序奏に当たる部分でトレモロが戻り、クライマックスに達して幻想の森から抜け出す。

第5部：ソナタの第3楽章に当たる。決然とした歓喜のテーマが現れ、再び「挨拶を送ります」の一節が歌い上げられる。「愛の息吹が時間と空間を超えるとき、そのとき僕は君のそばに、君は僕のそばにいるのです」

第6部：コーダ。力強いクライマックスを築き上げて結末を迎える。

## ◇ピアノソナタ第18番 ト長調 D.894 「幻想」

シューベルトが最後の弦楽四重奏曲ト長調を作曲した1826年10月に書き上げられた。シューマンはこの曲を「形式と精神において最も完成したもの」と評し、「ここでは全てが有機的で同じ生命を呼吸している」と称賛している。

第1楽章：ソナタの開始としてそれまでになかった新天地を開いている。この柔らかく豊かな和音の揺れは、後に変容を遂げ、揺れ動く主題の不思議な共振が抒情詩的に鳴り響く。素晴らしい夢を見たような不思議な筋運びで、結局その筋は説明できない。

第2楽章：第1楽章の筋の中に憧れの歌（デュエット）を浮かばせる。この中間部にほとぼる激情と深い悲しみは「水車小屋の娘」の主人公の心情と重なって聞こえないか？

第3楽章：同音反復（4楽章にも引き継がれる）のたたみかけるリズムはスケルツォ風だが、優雅な弾みは舞曲（メヌエット）風。トリオのやさしい転調が夢を誘う。

第4楽章：「楽しきさすらい」のロマン的終楽章。幸せなさすらいの若者が体験するいくつかの音楽的エピソードは、「水車小屋の娘」より軽快で「冬の旅」の影など全く予感させない。シューマンはこの楽章について一言だけ言っている。「ファンタジーを持たぬ者は、この楽章に近づくな。」

## ◇ヴァイオリンとピアノのための幻想曲 ハ長調 D.934

シューベルトの最晩年、歌曲「冬の旅」と同時期に、ヨーゼフ・スラヴィークというボヘミア出身の大ヴァイオリニストのために作曲されたもので、ロマンティックな旋律美と共に、ボヘミア的色彩やスラヴ的色彩が豊かに息づき、当時としてはかなり大胆といえるヴィルトゥオーソ的な書法もこの作品の魅力となっている。

また、「さすらい人幻想曲」が歌曲「さすらい人」の音形に基づいて書かれたように、この幻想曲には歌曲「挨拶をおくります」の気品あふれる旋律が3楽章で姿を現す。「さすらい人幻想曲」同様切れ目なく演奏されるが、全体は以下のような6つの部分から構成されている。

第1部：序奏のトレモロは民族楽器ツィンバロンの模倣。このトレモロの揺れはピアノソナタ「幻想」の冒頭とはまた違ったパルスだが、これこそシューベルトの幻想の森の入り口なのだろう。ゆったりしたヴァイオリンの抒情的な歌で始まる。

第2部：ソナタの1楽章に相当する部分で、自由なソナタ形式で書かれ、ヴァイオリンとピアノの技巧的な対話が面白い。

第3部：2楽章に当たる部分。変奏曲形式でリュッケルトの詩による歌曲「挨拶をおくります」D.741 が朗々と歌い出され4つの変奏が続く。

第4部：第3楽章の序奏に当たる部分でトレモロが戻り、クライマックスに達して幻想の森から抜け出す。

第5部：ソナタの第3楽章に当たる。決然とした歓喜のテーマが現れ、再び「挨拶を送ります」の一節が歌い上げられる。「愛の息吹が時間と空間を超えるとき、そのとき僕は君のそばに、君は僕のそばにいるのです」

第6部：コーダ。力強いクライマックスを築き上げて結末を迎える。